った名門の牧原源一郎氏も、その統制には苦心されていたようである。荒館村の場合は、それでも長い準備期間があったようなものである。三十一年北会津村の発足に際して、氏は推されてその初代村長についたが、役場の移転などの問題で、氏を窮地におちいらせたのは残念でならない。この複雑な町村合併に、必ずついて廻る難問に、真向から立ち向う人々の、尊い犠牲のようにさえ思われる。

不肖私は高邁な智徳は勿論、政治手腕においても、遙かに勝れた大先輩のあとをうけて、この村長の椅子についたが、学校の統合・移転などの難渋な問題に、ただちに直面しなければならなかった。その中でも、最も私を苦悩させたのは、この村の本質からくる洪水の災害防禦であった。昭和三十六年九月二十七日の宮川の氾濫では、村民の苦労して実らせた稲田が、その収穫期に、一朝にして泥土と化し、郡山自衛隊の献身的な援助をうけて、漸く救済する始末であった。このための宮川河川改修費は実に四億五千万円に達している。ようやく一期を果し、いままた二期を終ろうとして、いかにしてこの苦境をきりぬけてきたかを思うとき、実に感無量なるものがある。この苦労は、北会津村八千名近い人の、生活建設の生みの悩みでもあると思っている。私は鋭意、平和な豊かな、災害のない、健康な村をつくりたいと願って、昭和三十六年九州別府での治水全国大会には、声を大きくしてその実情を訴えてきたほどである。

ここに新たな村が発足して十ヵ年、これが丁度明治百年にも当るので、このへんで、古く語り伝えてきた村の成立ちなり、特に昭和三十六年の計画以来、今まさに成ろうとしている農業改善事業による、大地